

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284053

研究課題名(和文) 日本近代における文学理論的言説の総合的研究 西洋理論の移入と伝統的文学観の変容

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Modern Japanese Discourses on Literary Theory: Introduction of Western Theories and Changes in the Traditional View of Literature

研究代表者

大浦 康介(Oura, Yasusuke)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60185197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治期以来、日本において図書(研究書、文芸評論等)や雑誌(学術誌、文芸誌等)をつうじて発表された文学理論にかかわる諸文献についての総合的研究である。われわれは本研究を通して、国内外で広範な文献調査を行い、それにもとづいて日本近代の作家、批評家、文学研究者らの理論的業績を俯瞰的視点から跡づけた。また、そこで得られた知見と情報を、国内はもとより海外(フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ、ルーマニア、ハンガリー、台湾等)の研究者とも共有し、彼らとの意見交換をつうじて今後の日本学における理論的研究・教育の活性化の可能性を探った。

研究成果の概要(英文)：Our project is a comprehensive study of books (research monographs, literary criticism, etc) and periodicals (academic journals, literary magazines, etc.) concerned with the topic of "literary theory" from the Meiji period onward. By extensively examining Japanese as well as foreign materials, we have been able to ascertain the achievements of modern Japanese writers, critics, and researchers in the field of literary theory. We have shared the results of our work with specialists both in Japan and abroad (France, the UK, Germany, the US, Romania, Hungary, Taiwan, etc.), probing, through lively exchanges of ideas, the possible revitalization of theoretical research and education in Japanese studies.

研究分野：文学理論

キーワード：文学理論 物語論 フィクション論 読者論 詩的言語論

1. 研究開始当初の背景

文学理論には、「文学とは何か」を問う根本理論をはじめとして、ジャンル論、物語論、フィクション論、批評理論、読者論など、さまざまな分野があるが、日本では明治以降、西洋理論の圧倒的な影響のもと、坪内逍遙、夏目漱石、九鬼周造、岡崎義恵らをはじめとする作家や研究者によって、アカデミズムと文壇ジャーナリズムの双方において多くの文学理論的探究がなされてきた。そこには文化領域における日本の近代化の一側面が如実に反映されている。

ところが、今日、この種の著作が文学理論の観点から読み返されることは稀である。1950-60年代までの文献(たとえば日本で一学派を築いた「文芸学」の関連文献)に関しては、もはや単に読まれることすらほとんどない。私たちは、「新しい」、「最先端の」西洋理論を取り込むことには意を砕いても、日本でこれまで蓄積されてきた理論的成果を吟味することは怠ってきたのである。このあたりで一度、過去の「日本の文学理論」を俯瞰的に見渡しながらかみ直し、それを文学研究・教育の「今」につなげることはできないか。本研究の動機はそこにある。

2. 研究の目的

本研究は、明治期以降の日本において「文学論」「文芸学」「文学概論」といった呼称のもとに著されてきた文学をめぐる理論的言説が、今日の西洋理論の視点から見てどのような内容と価値をもっていたのか、また、いかなるアカデミズムと文壇ジャーナリズムを背景に成立し、研究と教育の場で用いられてきたのかを把握し、今後、国内および国外の大学・大学院などの高等教育機関において日本文学の研究・教育を行うさいに有効な文学理論とはどのような文献を用い、いかなる方法で実践すべきものなのかを総合的に探究することを目的としたものである。より具体的には、日本独自の文学理論を集成した

アーカイブの構築と、それをもとにした国内および国外の高等教育における日本型文学理論の実践的な研究・教育方法の提示をめざした。

3. 研究の方法

(1) 文献調査とフィールドワーク(アーカイブ構築と海外での学術調査): 明治期以降の文学理論関係の文献や資料を調査・収集・分析し、アーカイブを構築する。また欧米の日本文学研究・教育機関で理論教育の環境と実態についてフィールドワークを行う。

(2) 研究会と意見交換会(研究の進捗状況に関する情報の共有・検討): 定期的に研究会を開いて研究発表を行う。また、本研究の準備段階で作成された『日本の文学理論 アンソロジー(ベータ版)』についての意見交換会を開催する。

(3) 講演会・シンポジウム(外部研究者との交流と研究成果の社会発信): 国内外の日本文学および文学理論の専門家を招いて講演会・公開シンポジウムを開催する。最終年度には研究を総括する国際シンポジウムを京都大学人文科学研究所で開く。

4. 研究成果

(1) 平成26年度

文献調査とフィールドワーク

明治期以降の日本における文学理論関係文献の調査・収集・分析・データベース化を行ったが、この作業は当初の予定を大きく上回る速度で進展した。その成果は、本研究の準備研究ともいえるべき京都大学人文科学研究所での共同研究「日本の文学理論・芸術理論」のWebページおよびその成果報告書である『日本の文学理論 アンソロジー(ベータ版)』(平成27年3月刊。以下『アンソロジー』と略)で公開した。

研究会と意見交換会(国内)

重要文献の会読と『アンソロジー』刊行に向けた中間発表会を上記研究会と合同で開

催した。また『アンソロジー』刊行直前には、中村三春北海道大学教授と坪井秀人国際日本文化研究センター教授を招き、意見交換会を催した。

講演会・シンポジウム

8月27-30日にスロベニアのリュブリャナ大学で開催されたEAJS(ヨーロッパ日本研究協会)の第14回国際大会に研究代表者および分担者計四名(大浦・日高・久保・河田)が参加し、ユーディット・アロカイ教授(ハイデルベルク大学日文学科)らとともにラウンドテーブルを開き、本研究のテーマに関する研究発表と討論を行った。またこの機会にハンガリー・ブダペストのカーロリガーシュバール大学人文学部日本研究科とハンガリー科学アカデミーを訪問し、カーロリ大学ではアティッラ・ゲルゲイ教授らと意見交換、科学アカデミーでは東洋コレクションを見学して、日本関係文献の調査を行った。

(2) 平成27年度

文献調査とフィールドワーク

文献調査においては、『アンソロジー』の文献年表で公表した基本データに加えて、とくに生命論、精神分析、動物哲学などの分野でのデータ充実をはかった。またこの年度からは、海外の大学における日本文学研究・教育の環境と実態に関するフィールドワークを始めた。まず9月にルーマニアのディミトリエ・カンテミール大学で開かれた日本学研究集会に参加し、研究代表者の大浦がフィクション論関係の基調講演を、研究分担者の久保、河田、中村が描写論にかかわるパネル発表を行った。また研究分担者の西川とホルカはそれぞれ分科会発表を行った。その成果は『ディミトリエ・カンテミール大学年報』第XVI号(No.1/2016)に掲載された。

続いて11~12月には、フランス国立東洋言語文化学院(INALCO)、パリ第7大学東アジア言語文化学部(LCAO)、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)を、また28年3

月には国立台湾大学日本語文学科と淡江大学村上春樹研究センターを訪問し、講演・パネル発表・ワークショップなどを行うとともに、日本文学に関する理論教育の現状や可能性についての意見交換、図書館視察などを行った。

研究会と意見交換会(国内)

定期的研究会においては、前年度に引き続き重要文献の会読を進めたが、27年度はとくに文学論争やフィクション論に関する文献会読を重視した。また、10月には西田谷洋富山大教授を、28年2月には日比嘉隆名古屋大准教授を招いて、前年度に引き続き『アンソロジー』についての意見交換会を開いた。

講演会・シンポジウム

「文芸学再考」と題して、12月に大阪大学文芸学研究会と共催でシンポジウムを開催した。とくに文芸学における岡崎義恵の業績に焦点を絞り、森谷宇一阪大名誉教授と中村三春北大教授に講演をしていただいた。

(3) 平成28年度

文献調査とフィールドワーク

9月に、大浦、日高、河田、岩松、ホルカ、久保がアメリカ合衆国のミシガン大学、ハーヴァード大学、プリンストン大学を訪問。ハーヴァード・イェンチンなどの大学図書館で日文学関係蔵書の文献調査を行うとともに、上田敦子プリンストン大学准教授をはじめとする各大学の日本学科ないし東アジア学科のスタッフとアメリカにおける日文学研究・教育の現状(近年の研究動向、学生数の推移、研究・教育環境の変化など)について意見交換を行った。また29年2月には大浦と久保がドイツのハイデルベルク大学とベルリン自由大学を訪問。日文学関係蔵書の文献調査を行うとともに、ハイデルベルク大学ではユーディット・アロカイ教授が企画したワークショップ「日本の文学理論・日本文学を理論する」で研究発表を行った。ベルリン自由大学ではドイツでの日本近代文学研究

の歴史と展望についてイルメラ・日地谷 = キルシュネライト教授からレクチャーを受けた。

研究会と意見交換会（国内）

定期的な研究会では、前年に引き続き、フィクション論に関する基本的理論文献の会読と研究発表（フィクション論的観点からする日本近代文学作品の分析）を行った。

講演会・シンポジウム

6月に、パリ第3大学のフランソワーズ・ラヴォカ教授を招き、"Fait et fiction : une perspective comparatiste"と題する講演会を開いた。また7月には、日高佳紀、リチャード・カリチマン教授（ニューヨーク市立大学）、アンヌ・バイヤール = 坂井教授（フランスINALCO）を講師として、「人文学の危機」と文学研究：いま文学理論に何ができるか」と題する国際シンポジウムを開いた。我々はこれを、2017年6月刊行予定の『日本の文学理論 アンソロジー』（決定版）とともに、本研究の総決算と位置づけている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

Yasusuke Oura, Fiction and Fictionality in Japanese Culture: Shishosetsu (I-Novel) and "Otaku" Culture, *Analele Universitatii*, 査読有、Vol.XVI, No.1, 2016, 8-22
<http://analefls.ucdc.ro>

Tomoe Nakamura, Akihiro Kubo, Manabu Kawada, Description and Point of View in the Modern Japanese Novel: Iwano Homei's Theoretical Discourse, *Analele Universitatii*, 査読有、Vol.XVI, No.1, 2016, 23-41
<http://analefls.ucdc.ro>

Irina Holca, Romania and Japan: Real and Imaginary Encounters at the Turn of the 20th Century, *Analele Universitatii*, 査読有、Vol.XVI, No.1, 2016, 178-190
<http://analefls.ucdc.ro>

Yasusuke Oura, Le Romanesque selon Barthes, *Littera : Revue de Langue et Litterature Francaises*, 査読無、No.1, 2016, 14-19

日高佳紀、「日本近代文学研究」専門家としての役割、日本近代文学、査読無、第 93

集、2015, 183-189

河田学、十八世紀イギリス小説におけるパラテキストの検討 フィクション論的観点から、京都造形芸術大学紀要『GENESIS』、査読有、第 19 号、2015, 44-56
<https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp>

西川貴子、新聞小説「更生記」の世界 絵と文の協奏、同志社国文学、査読有、第 84 号、2015, 158-169
<https://doors.doshisha.ac.jp>

中村ともえ、正岡子規「瓶にさす」歌の鑑賞、国語と国文学、査読無、92 巻 11 号、2015, 136-146

日高佳紀、狂気への回路 谷崎潤一郎「白黒」の読者と挿絵、奈良教育大学国文学—研究と教育、査読無、38 号、2015, 15-43
笹尾佳代、メディアとしての白蓮事件：事件報道と「鳳凰天に拍つ」をめぐる、Juncture 超域的日本文化研究、査読有、6 号、2015, 42-54

西川貴子、佐藤春夫「更生記」論 「狂気」をめぐる語り、同志社国文学、査読有、81 号、2014, 266-277
<https://doors.doshisha.ac.jp>

笹尾佳代、新生新派の樋口一葉 「一葉舟」のドラマトゥルギー、同志社国文学、査読有、81 号、2014, 278-290
<https://doors.doshisha.ac.jp>

〔学会発表〕(計 46 件)

大浦康介、『日本の文学理論』プロジェクトの概要と国内外での反響、国際ワークショップ「日本の文学理論・日本文学を理論する」、2017 年 2 月 20 日、ハイデルベルク大学（ハイデルベルク・ドイツ）

久保昭博、文学の理念とその外部 日本近代における文学の起源・発生をめぐる言説、国際ワークショップ「日本の文学理論・日本文学を理論する」、2017 年 2 月 20 日、ハイデルベルク大学（ハイデルベルク・ドイツ）

Irina Holca, Walking the Fine Line between "Literary Account" and "Report on Reality": Shimazaki Tosen's "Namiki" and Moderu-ronso, 11th International Symposium for Japanese Language, Education and Japanese Studies, 2016 年 11 月 19~20 日、Open University of Hong Kong (香港・中華人民共和国)

日高佳紀、谷崎潤一郎『文章読本』の可能性、国際シンポジウム「人文学の危機」と文学研究：いま文学理論に何ができるか、2016 年 7 月 31 日、京都大学（京都府・京都市）

河田学、ナラトロジーからみた岩野泡鳴の描写論 ヘンリー・ジェームズとの比較から、日本近代文学会春季大会、2016 年 5 月 29 日、亜細亜大学（東京都・武蔵野市）

久保昭博、岩野泡鳴の理論的言説、日本近代文学会春季大会、2016 年 5 月 29 日、亜細亜大学（東京都・武蔵野市）

中村ともえ、描写と主人公 岩野泡鳴の一元描写論と小説における一元描写、日本近代文学会春季大会、2016年5月29日、亜細亜大学(東京都・武蔵野市)

大浦康介、日高佳紀、久保昭博、笹尾佳代、日本の文学理論と文学研究の方法、国際ワークショップ、2016年3月24日、国立台湾大学(台北市・台湾)

Yasusuke Oura, Fiction and Fictionality in Japanese Culture: Shishosetsu (I-Novel) and "Otaku" Culture, Japan: Premodern, Modern and Contemporary. 3rd International Conference, 2015年9月9日、ディミトリエ・カンテミール大学(ブカレスト・ルーマニア)

Tomoe Nakamura, Akihiro Kubo, Manabu Kawada, Description and Point of View in the Modern Japanese Novel: Iwano Homei's Theoretical Discourse, Japan: Premodern, Modern and Contemporary. 3rd International Conference, 2015年9月9日、ディミトリエ・カンテミール大学(ブカレスト・ルーマニア)

大浦康介、日高佳紀、河田学、久保昭博、ユードット・アロカイ、ラウンドテーブル「日本の文学理論 西洋モデルと伝統的文学観のはざままで」、14th EAJS International Conference, 2014年8月29日、リュブリャナ大学(リュブリャナ・スロベニア)

〔図書〕(計 16 件)

日高佳紀、大浦康介、笹尾佳代、中村ともえ 他、翰林書房、谷崎潤一郎読本、2016、356

日高佳紀 他、ひつじ書房、ハンドブック 日本近代文学研究の方法、2016、256

大浦康介 他(森本淳生編)、水声社、生表象の近代 自伝・フィクション・学知、2015、480

日高佳紀、双文社出版、谷崎潤一郎のディスクール 近代読者への接近、2015、305

永田知之、京都大学学術出版会、唐代の文学理論 「復古」と「創新」、2015、552

大浦康介、岩松正洋、中村ともえ、久保昭博、西川貴子、河田学、笹尾佳代、日高佳紀、齋藤涉、永田知之、イリナ・ホルカ 他、京都大学人文科学研究所、日本の文学理論 アンソロジー(ベータ版)、2015、397

西川貴子 他、外語教学与研究出版社、日本近現代文学研究、2014、641

久保昭博 他(山田広昭編)、七月堂、言語態研究の現在、2014、347

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大浦 康介 (OURA, Yasusuke)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：60185197

(2) 研究分担者

日高 佳紀 (HIDAKA, Yoshiki)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00335465

河田 学 (KAWADA, Manabu)
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：00569923

齋藤 涉 (SAITO, Sho)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20314411

西川貴子 (NISHIKAWA, Atsuko)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：20388036

ホルカ イリナ (HOLCA, Irina)
京都大学・人文科学研究所・講師
研究者番号：40760343

久保 昭博 (Kubo, Akihiro)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：60432324

笹尾 佳代 (SASAO, Kayo)
神戸女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：60567551

中村 ともえ (NAKAMURA, Tomoe)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：70580637

岩松 正洋 (IWAMATSU, Masahiro)
関西学院大学・商学部・教授
研究者番号：80273952

永田 知之 (NAGATA, Tomoyuki)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：80402808

(4) 研究協力者

榊原 理智 (SAKAKIBARA, Richi)
早稲田大学・国際教養学術院・教授
研究者番号：00313825

高橋 幸平 (TAKAHASHI, Kohei)
同志社女子大学・表象文化学部・准教授
研究者番号：40581567